The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「助言」の会話の日・タイ対照研究 : 女子大学生の友人同士の会話に着目して
Author(s)	Daengsubha, Suwatana
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55715
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（DAENGSUBHA SUWATANA）	
論文題名	「助言」の会話の日・タイ対照研究―女子大学生の友人同士の会話に着目して―

論文内容の要旨

「助言」は、「相手の抱えている問題や悩みを解決する方法を提案するために行う言語行動」である。「助言」は相手がより望ましい状況になるための発話であるが、Brown & Levinson（1987）では「助言」は、相手のネガティブ・フェイスに触れる言語行動であるため、相手の不満を招く可能性があると述べている。従って、日本語学習者にとって、母語と日本語での「助言」の方法が異なる場合、日本語母語話者とは異なった方法で「助言」してしまうと、コミュニケーション上の問題を引き起こし、人間関係を壊すことにもなりかねない。そのため日本語学習者は、母語の「助言」と比較しながら、日本語における「助言」の言語行動を学習する必要があると考えられる。

ところが、日本語とタイ語における「助言」の会話を対照する研究は、デンスパー（2013）しか見当たらない。そこで、本稿では、デンスパー（2013）の研究結果を踏まえて、日本語と、筆者の母語であるタイ語における「助言」の方法をさらに明らかにするため、問題の事柄の深刻度、および問題の共有・非共有という「助言」に影響を与える2つの要因に着目し、日本語とタイ語における「助言」の談話構造と表現の対照研究を行った。調査協力者は日本語母語話者とタイ語母語話者の20代前半の女子大学生で、2012年2月～2014年5月に大阪とバンコクで調査を行った。各言語の母語話者10ペア計20名ずつに「助言」のロールプレイをしてもらい、録音した会話を文字化し、分析対象のデータとして用いた。分析にあたっては、より詳しい区分基準を使い、「助言」の会話全体を大きく、開始部、主要部、終了部に分け、さらに≪開始の部分≫、≪問題提示の部分①≫、≪問題提示の部分②～≫、≪解決案提示の部分≫、≪助言の部分≫、≪問題共有の部分≫、≪決意表明の部分≫、≪終了の部分≫の8種類の部分に区分した。

本稿は、日本語とタイ語における「助言」の方法を明らかにするため、助言場面におけるロールプレイデータを用いて、日本語とタイ語における「助言」の談話構造とその特徴を分析した上で、両言語の共通点・相違点を明らかにし、タイ語母語話者への日本語教育に応用するための基礎研究となることを目指すものである。

以下、本研究の結果をまとめる。

1.「助言」の談話構造の全体的な流れ

（1）両言語の共通点

開始部において、両言語では、相談者が今抱えている問題の事情について説明をしたり、助言者に助言を求めたりするという≪A問題提示の部分①≫が見られた。また、相談者・助言者が共に抱える、深刻度が低い問題（場面③）において、両言語共、≪Aの問題提示の部分①≫の後、≪Bの問題提示の部分①≫に移り、助言者が相談者と同じ問題を抱えていることを伝えたり、助言を求めたりするという流れがあった。

主要部において、両言語ではまず、開始部における相談者または助言者の≪A/Bの問題提示の部分①≫に対して、相手が≪A/Bに対する助言の部分≫で更なる情報を求めて問題の詳細を把握した後、助言を行っていた。それから、相談者または助言者が≪A/Bの問題提示の部分②～≫において、さらに詳しい問題を出したり、相手に助言を求めたり、または≪A/Bの解決案提示の部分≫において、自分で考えた解決案について宣言したり、相手の解決案について尋ねたりしていた。それに対して、助言者または相談者は再び≪A/Bに対する助言の部分≫において、相手の問題に関する情報を求めたり、助言を行ったりしていた。その後、≪A/Bの問題提示の部分③～≫または≪A/Bの解決案提示の部分≫と≪A/Bに対する助言の部分≫が繰り返されることによって、相談者または助言者の問題に対する解決案が少しずつ明らかになっていくという流れが見られた。

終了部において、両言語では、相談者または助言者が問題に対する決意を示すという≪A/Bの決意表明の部分≫が見られた。

（2）日本語のみの特徴

開始部において、全ての場面では、相談者による≪Aの問題提示の部分①≫に入る前に、相談者と助言者がスモールトークを行う≪開始の部分≫が見られた。

主要部において、相談者のみが抱える問題の場面も、相談者・助言者が共に抱える問題の場面も、相談者と助言者が問題について悩んでいることをお互いに言い合うという≪A・Bの問題共有の部分≫が見られた。このような部分は、タイ語のデータでは見られなかったため、日本語の特徴であると言える。

終了部において、日本語では、相談者と助言者はお互い同じ問題を抱えているという同じ立場の者同士として問題解決を行おうとするため、相談者・助言者が共に抱える問題の場面では、相談者と助言者が問題に対して同じような決意をするという≪A・Bの決意表明の部分≫があった。また、日本語母語話者には、相談者または助言者の問題に対する解決案が決まった後、相談者・助言者とも何か助言の内容に関連する話を共有することで共感し合う機会を作ってから、会話を終わらせることが好まれるため、相談者と助言者との≪雑談≫が見られた。

（3）タイ語のみの特徴

主要部において、相談者・助言者が共に抱える、深刻度が高い場面（場面④）では、相談者による≪Aの問題提示の部分①≫の後、≪Bの解決案提示の部分≫に移り、相談者が同じ問題を抱えている助言者への配慮を示すと同時に問題解決の手がかりとするため、助言者にこれからの解決案について尋ねたり、助言者が先に自分で考えた解決案について宣言したりしていた。このような部分は、日本語のデータでは見られなかったため、タイ語の特徴であると言える。

終了部において、タイ語母語話者には、問題を解決するために具体的な行動をすることが好まれるため、相談者のみが抱える、深刻度が低い場面（場面①）と相談者・助言者が共に抱える、深刻度が低い場面（場面③）では、≪終了の部分≫に入る前に、相談者は助言者に依頼をしたり、勧誘をしたりするという≪依頼≫と≪勧誘≫の部分があった。また、タイ語母語話者、特に女性同士の間で、親しい関係の相手と一緒に何かをするという共同行為が好まれるため、全ての場面では、相談者または助言者は相手が一緒に次の授業に行ってくれるように相手を誘い、相手がその誘いに対して受け入れるという≪終了の部分≫が見られた。

2.「助言」の談話構造における会話の部分ごとの特徴

（1）開始部

両言語では、深刻度が高い場面（場面②、④）において、相談者が【事情説明】で今抱えている問題の内容について説明をすることによって、非明示的に助言者に助言を求める傾向が見られた。一方、相談者・助言者が共に抱える、深刻度が低い場面③において、両言語共、相談者が【事情説明】をしてから、相談者が続けて【助言要求】で助言者に明示的に助言を求める傾向が見られた。一方、相談者のみが抱える、深刻度が低い場面①において、日本語では、助言者にできるだけ負担をかけたり、押しつけがましく思われたりしないように、相談者が【事情説明】で非明示的に助言を求める傾向があったが、タイ語では、助言者にただ問題に対する文句を言っているだけだと思われないように、相談者が【助言要求】で明示的に助言を求める傾向が見られた。

また、相談者・助言者が共に抱える問題の場面において、両言語共、助言者の≪Bの問題提示の部分①≫に移り、日本語では、助言者が【同事情説明】で相談者と同じ問題を抱えていることを伝え、同じ立場の者同士として問題解決を行おうとするのに対して、タイ語では、助言者が相談者に【助言要求】で明示的に助言を求め、相談者と助言者それぞれの立場を維持して問題解決をしようとしている。

（2）主要部

1）助言の仕方

≪A/Bの問題提示の部分①/②～≫または≪A/Bの解決案提示の部分≫に対する≪A/Bに対する助言の部分≫において、日本語では、深刻度が低い場面（場面①、③）において、助言者または相談者が【提案】をすることによって、相手に明示的に助言を行う傾向があった。しかし、深刻度が高い場面（場面②、④）において、より助言しにくい内容でもあるが、相手に押しつけがましくならないように、助言者または相談者が【意見提示】で自分の意見を述べたり、【情報提供】で問題に関する情報を与えたりすることによって、相手に非明示的に助言を行う傾向が見られた。

それに対して、タイ語では、助言者または相談者が相手のために考えた問題に対する解決案が相手にとって一番適切だと思い、相手がその通りにするように、いずれの場面においても、【提案】の形で相手に明示的に助言を行う傾向が強かった。

2）配慮の仕方

日本語母語話者は、≪A・Bの問題共有の部分≫において、問題を抱えている相手と同じ立場に立って相手に【共感】をすることによって、相手への配慮を示すのに対して、タイ語母語話者は、≪A/Bの解決案提示の部分≫において、助

言者の立場から【情報要求】で相手の問題に対する解決案について尋ね、相手への関心を示すことによって、相手への配慮を示している。

（3）終了部

両言語共、いずれの場面においても、相談者と助言者が【決意表明】で問題に対してそれぞれ異なる決意を示すという≪A/Bの決意表明の部分≫があったが、日本語のみでは、相談者・助言者が共に抱える問題において、相談者と助言者が問題に対する同じような決意をするという≪A・Bの決意表明の部分≫も見られた。

以上に述べた結果から、「助言」の対象となる問題の事柄の深刻度、及び問題の共有・非共有が異なる場面において、日本語とタイ語における「助言」の共通点・相違点が明らかになった。また、その背景にある、日本とタイの社会における考え方や文化が違うことによって、両言語における「助言」の談話構造とその特徴が異なることが分かった。今後、本稿で得られた結果を、日本語教育に応用することによって、日本語母語話者とタイ語母語話者がさらに円滑なコミュニケーションができるようになることを期待している。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　DAENGSUBHA SUWATANA　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	筒井　佐代
	副 査　教授	鈴木　睦
	副 査　教授	宮本　マラシー
	副 査　教授	真嶋　潤子
	副 査　教授	岸田　泰浩

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、日本語とタイ語における「助言」の会話の構造とその会話で用いられる言語形式を分析して対照し、タイ語を母語とする日本語学習者への日本語教育に応用することを目的とした研究である。「助言」に関する研究は日本語においても少なく、タイ語ではほぼないに等しいため、本博士論文はこの分野での先駆的な研究であると言える。分析データは、日本語とタイ語の「助言」の会話をロールプレイの手法で収集し文字化したものであるが、ロールプレイ場面の設定において、相談者の抱える問題の深刻度の高低と問題の共有・非共有という要因によって4つの場面を設定し、それぞれの場面ごとの分析を行い、当該の要因による会話の構造と言語形式への影響について考察している。「助言」の研究において、問題の深刻度および共有・非共有という概念が用いられたのはこの研究が初めてであり、これらの要因が「助言」の仕方に影響を与えることが指摘されたことは、言語行動の研究における一つの重要な発見として評価できる。

本博士論文の主張は、日本語母語話者は、相談者と助言者が同等の立場に立ち、押しつけがましくならないように非明示的に助言を求めたり助言を行ったりする傾向があるのに対し、タイ語母語話者は助言者が上の立場に立ち、相談者は明示的に助言者に助言を求め、助言者は相談者にとって最良の解決案を提示してそのように行動することを求める傾向があるというものである。このような傾向を裏付ける現象として、データの詳細な分析から以下のことが指摘されている。すなわち、日本語では問題を抱える相手への共感を示して問題を共有し、特に双方が同じ問題を抱えている場合にはお互いに同じような決意を表明することによって同じ立場のものとして問題解決を行っていること、それに対して、タイ語では双方が同じ問題を抱えている場合であっても、相談者と助言者の立場を維持し、お互いそれぞれの問題として問題解決を行っていること、また具体的な言語形式について、日本語の助言要求は「どうしたらいいのかわからなくて」のような事情説明の形式であるのに対し、タイ語では「何かいいのを教えてよ」といった助言要求の形式であること、助言については、日本語は「～してみるとか」「～がいいかもしれない」など不確かさを表す表現、一方タイ語では「～しないといけないよ」「～してみて」などの相談者に明示的に働きかける表現が多く見られたことなどである。このような日本語とタイ語の違いに基づき、タイ語を母語とする日本語学習者がタイ語のやり方を用いて日本語で「助言」の会話を行った場合に生じる可能性のある、様々なコミュニケーション上の問題点が列挙されており、これらは実際の日本語教育現場に反映させるべき示唆に富む指摘であると言える。

このような両言語の言語運用の相違の背景にある考え方や価値観について、さらに踏み込んだ議論や考察ができれば、より説得力のある研究となったと思われるが、そのことを差し引いても、本博士論文は詳細なデータ分析に基づく実証的な対照研究として重要な価値のあるものであり、日本語の会話教育の現場や教材作成に大きく貢献する研究として、高く評価できる。

以上のことより、審査委員会一同は、論文審査の結果を合格と判断するに至った。